

宝永地震による崩壊

南海トラフの巨大地震により斜面災害が発生することが懸念されています。四国では過去の地震時に大規模な斜面崩壊が起こったことが分かっています。宝永4年(1707)の宝永地震により発生した五剣山の崩壊と加奈木の崩え(つえ)の例をご紹介します。

■五剣山の崩壊(香川県高松市)

宝永4年(1707)10月4日の地震により、香川県牟礼町と庵治町(いずれも現高松市)の境に位置する五剣山の東端の峯が崩壊しました。増補高松藩記には、「未の時(午後2時頃)地大いに震える。声は雷の如く、地裂けて水湧き出す。河海に瀕ゆる砂地は特に甚し。五剣山東の一峯崩墜して火花雷の如く、響き遠く聞ゆ。墓石は悉く倒れ、井筒皆突き出し、家屋壊崩し、結構堅固なりと唯一として傾かざるなし。」と記されています。牟礼町教育委員会・香川大学工学部長谷川研究室の調査(2002年)によれば、崩落した岩塊は、北部の峯が主として庵治町側を、南部の峯が牟礼町側を襲ったと推定されています。<高松市編「庵治町史」2007年、牟礼町教育委員会・香川大学工学部長谷川研究室「1707年宝永地震による五剣山の崩壊に関する調査研究報告書」2002年など>



■加奈木の崩え(高知県室戸市)

加奈木の崩えは、高知県室戸市の佐喜浜川源頭部に位置します。崩壊は約45haに及ぶ大規模なもので、最大幅が約500m、崩壊最下流部から最上流部までの水平距離は1,600mに及びます。宝永4年(1707)の地震時に大規模崩壊が発生して岩屑流堆積物が堆積し、延享3年(1746)の豪雨により土石流が発生して2次堆積物が堆積したと推定されています。その後台風や地震のたびごとに崩壊を繰り返し、崩壊土砂は土石流となり、佐喜浜川中下流域に被害を与えました。崩壊の原因の大部分が国有林の崩壊にあるため、大正6年(1917)から昭和39年(1964)にかけて直轄治山事業が行われました。佐喜浜川沿いに記念碑が建立されています。<長谷川修一「四国における地震による深層崩壊と大規模地すべり」(砂防学会研究発表会概要集 Vol. 61、2012年)、北代典史「大規模崩壊地(加奈木のつえ)の復旧により地域を保全した大道南山復旧治山事業」(水利科学 No. 352、2016年)など>

